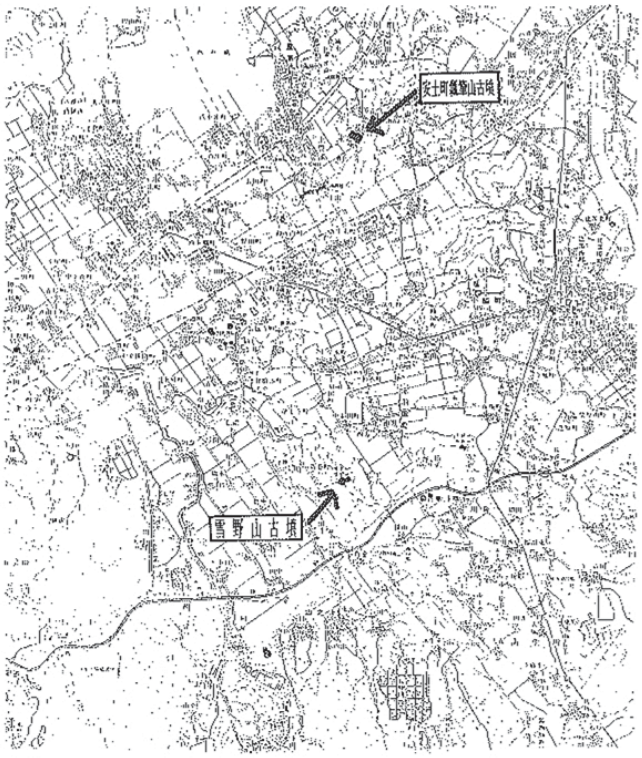
雪野山古墳

はじめに

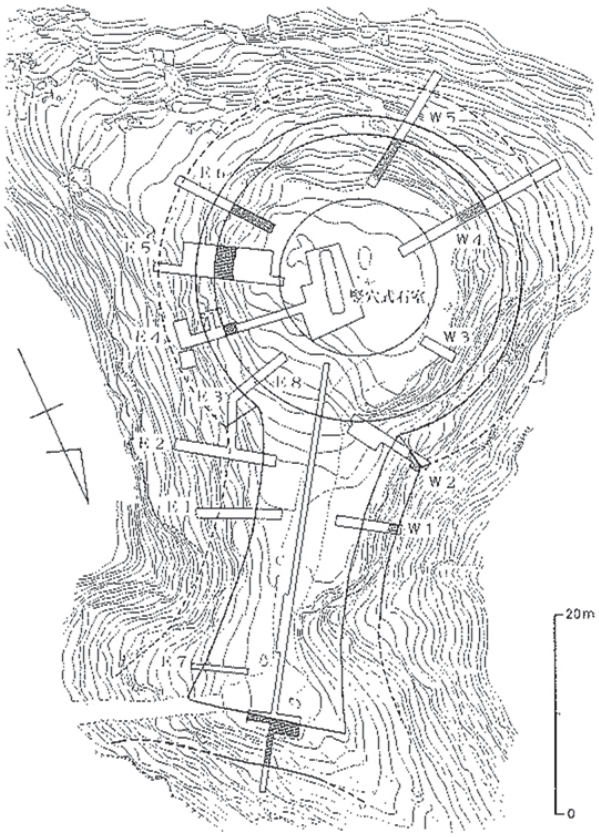
雪野山（龍王山ともいいます）は八日市市の西南端に位置し、蒲生郡竜王町・蒲生町及び近江八幡市にまたがる細長い山です。小高い峰が８つあるところから龍に見たてられ、一番高い山頂（標高308.8m）には八大龍王をまつる祠が建てられていました。龍神が住む神聖な山としてふもとの人々に崇められていたのです。

1989年（平成元年）９月、その山頂部で竪穴式石室が発見され、雪野山の山頂に古墳時代前期の古墳が築造されていたことがわかりました。これが雪野山古墳です。

大阪大学文学部の都出比呂志教授を調査団長とする雪野山古墳発掘調査団の手によって詳細な調査が実施され、これからご紹介するような多くの成果が得られました。



第１図　雪野山古墳位置図



第２図　雪野山古墳推定復元図
▦は葺石残存部分（または自然の岩盤を利用して葺石のように見せかけている部分）

墳丘

雪野山古墳は山の頂上部に後円部、それに続く尾根に前方部をもつ前方後円墳です。後円部は斜面の中ほどに平坦面がめぐる２段築成で、その平坦面が北北西に伸びて前方部となっています。

自然の傾斜面を削り出し、窪んだ部分には土を盛って墳丘を形づくっています。又、墳丘の斜面には葺石をはりつけていますが、岩肌を削っただけで葺石のように見せかけている個所もあるようです。

古墳の規模は全長70m、後円部直径40m・同高さ4.5m以上、前方部の長さ30m・同高さ2.5m以上です。

1991. 12. 2　　財団法人　滋賀県文化財保護協会

埋葬施設

後円部の墳頂部やや東寄りの位置に、ほぼ南北方位（N－11°－E）を主軸とする竪穴式石室が存在し、石室の床面には粘土を敷いた上に舟形木棺が安置されていました。

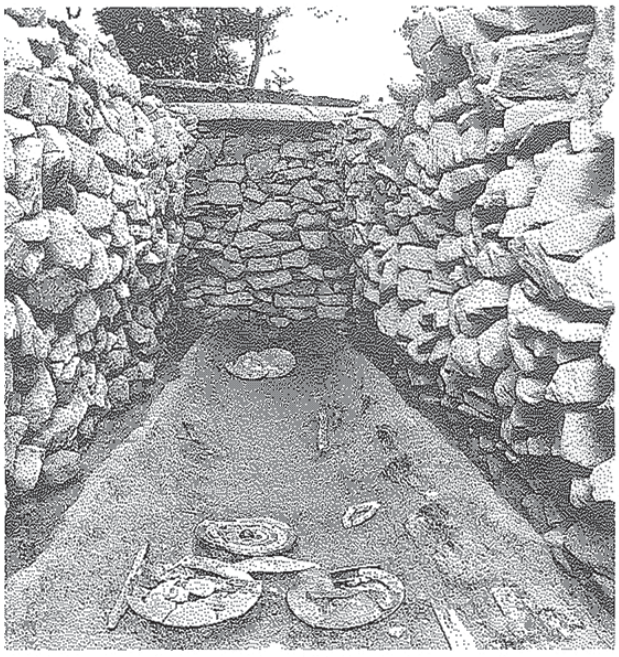
＜竪穴式石室＞

石室の規模は長さ6.1m、幅は北端で1.5m・南端で1.35mあり、高さは北端で1.6m・南端で1.4mです。幅も高さも北側の方が大きくつくられています。両短辺の上面では壁面が丸くわん曲していますが、全体的には持ち送り（壁のせり出し）は少ないようです。

壁は小さい石を小口積み風に積み上げていますが、かなり不整いです。下半部はやや内傾気味に積み上げ、中ほどの高さで一旦積むのを停止し、再び今度はほぼ垂直に積み上げています。壁面には一面に赤色顔料（ベンガラ＝酸化鉄）が塗られていました。

天井石は南端に１枚しか残っていませんでしたが、偏平な石を10枚ほど連ねて側壁を覆い、その上やすきまに粘土を貼って密封していたようです。

天井石や壁の石は全て湖東流紋岩が用いられていましたが、これらは雪野山を形成する岩石で、尾根のいたる所に露頭しています。



石室（横から）

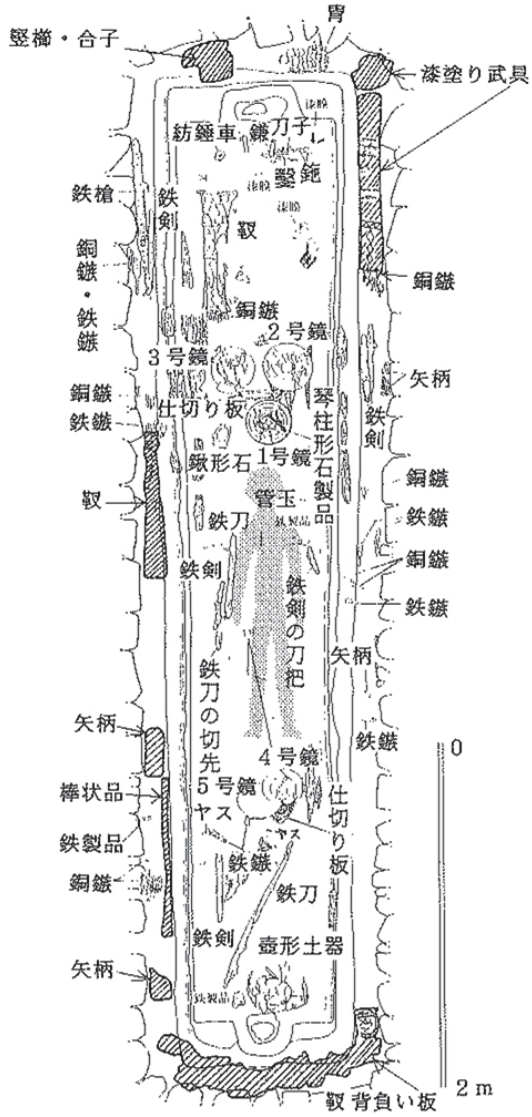
石室（上から）

＜粘土床＞

石室内部の床面には木棺を安置するための粘土床がすえられていて、木棺の痕跡が残されていました。墓壙（石室を築くために掘った穴）の底に細かい砂を敷きつめ、黄灰色粘土で床をこしらえています。

粘土床の長さは5.7m、幅は北端で1.15m・南端で1.1m、厚さは東西端の厚い部分で20cm、中央部のうすい部分で７cmでした。

粘土床のまん中を東西に切った断面のカーブが円形とならずゆるやかなところから、木棺は舟底形をしていたことがわかります。又、南北端の木口部に半リング状の痕跡も残されていました。



第３図　石室内出土遺物

＜木棺＞

粘土状痕跡から、木棺は長さ5.2m、幅は北端0.9m・南端0.8mで、両木口に半環状の縄掛突起をもつ刳り抜き式の舟形木棺であったと理解されます。

粘土床上に置かれた木棺は大半が腐って消失していましたが部分的には残存しています。これらの残存した木棺片は木目が南北方向にあるのですが、２箇所だけ例外的に東西方向を向いていました。それは銅鏡の出土した下からです。このことから、木棺の内部は２箇所に間仕切りがあったことが推定されます。

出土遺物

竪穴式石室内の粘土床上（木棺内）及び棺外の壁とのすきまに多量の副葬品が置かれていました。また、墳丘斜面からも遺物が出土しています。

～第１次調査時（石室棺内、棺外）～

１号鏡…内行花文鏡（仿製鏡）

２号鏡…鼉龍鏡（仿製鏡）

３号鏡…三角縁波文帯盤龍鏡（中国鏡）

４号鏡…三角縁唐草文帯四神四獣鏡（中国鏡）

「天王日月」の刻印あり。

５号鏡…三角縁亲出銘四神四獣鏡（中国鏡）

鍬形石…淡緑灰色の碧玉製。長さ13.4cm。

琴柱形石製品…暗緑灰色の碧玉製。

長さ11.6cm。

紡錘車形石製品…淡緑色の碧玉製。２個出土。

管玉…淡緑色の碧玉製。長さ1.5cm。直径６mm。

鞦…長さ70cm、菱形文の編目があり、黒漆の上に赤色顔料（朱）を施す。18本の矢を入れており、銅鏃・矢柄が残る。

銅鏃…総数80本以上。柳葉式（３種）・ノミ頭式・腸抉式（２種）の６種あり。

小札革綴冑…舌状の小札を革ひもでとじあわせた形式で、大・中・小の小札を６段重ねている。

壺形土器…口縁径18cm・底径5.5cmの２重口縁壺で、頸部外面に突帯がつく。

鉄製品…武器　刀・剣・槍・鉄鏃

農工漁具　鉈・刀子・ノミ・針・鎌・ヤス

～第３次調査時（石室棺外）～

竪櫛…16個出土。幅約2.9cm、ムネの長さ2.4cm。

合子…１個。推定の直径10～12cm、高さ10cm。

漆製武具…鞦あるいは甲。

鞦…長さ74cm、幅13cm。

棒状品…長さ95cm、幅2.5cm。

鞦の背負板…長さ130cm、幅50cm。

※これらは製品に塗られた漆膜の遺存によって明らかとなったものです。

～第３次調査時（棺外）～

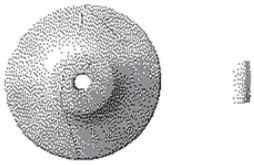
内行花文鏡

龍鏡

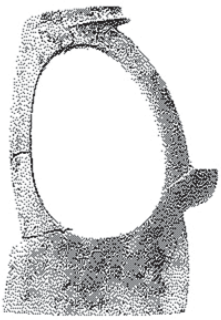
三角縁波文帯盤龍鏡

三角縁唐草文帯四神四獣鏡

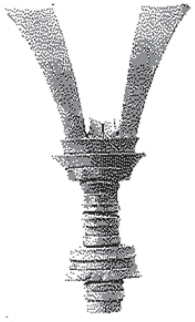
三角縁桒出銘四神四獣鏡



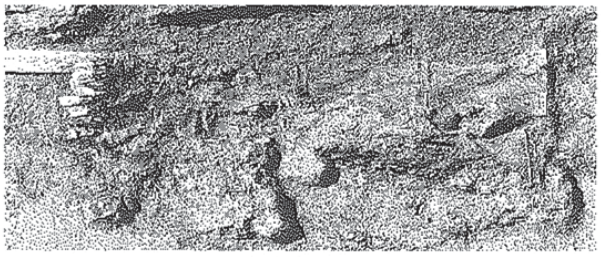
紡錘車形石製品・管玉



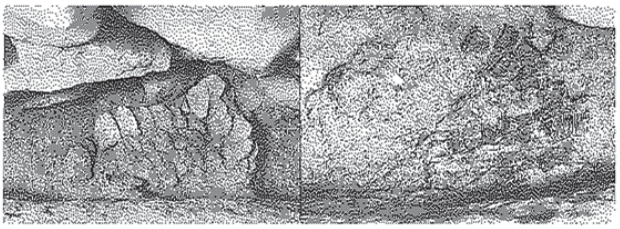
鍬形石



琴柱形石製品



鞆と銅鏃



小札革綴冑　　合子と櫛

土器…二重口縁壺、甕などの土師器

まとめ

雪野山古墳は4世紀中葉に築造された、葺石をもつ2段築成の前方後円墳です。後円部の墳頂部東寄りに竪穴式石室が1基存し、石室内の粘土床の上には環状縄掛突起をもつ舟形木棺が安置されていたことがわかりました。木棺痕跡の内外からは5面の銅鏡や5点の碧玉製品をはじめ、数多くの武器・農工漁具等の副葬品が出土しています。とくに漆膜の精査によってこれまで明らかでなかった遺物の出土も確認されています。(鞆の背負板や合子等)

竪穴式石室の構築方法や前方部の形態など未解明な部分もあり、平成4年には第4次調査が計画されています。そこで今回は現時点での資料紹介にとどめましたが、雪野山古墳は前期古墳研究の進展のために多くの貴重な資料を提供しただけでなく、この時期における湖東地域のとらえ方に新たな問題を提起しました。

前期古墳は墓であるとともに首長権継承の儀式の場であったとされています。石室内に副葬された鏡・玉及び武器類は、被葬者が司祭者としての権威、軍事力及びそれらをつくり出す技術力を掌握して当地域を支配した首長であったことを物語っています。さらに当古墳が前方後円墳であり三角縁神獣鏡を3面副葬していることから、被葬者がヤマト政権と深く結びつき、その承認のもとで当地域の支配権を確立していった姿がうかがわれます。

湖東地域には滋賀県で最大の規模をもつ前方後円墳である安土町瓢箪山古墳が雪野山古墳と相前後する時期に築かれており、これら両被葬者の関係が今後の課題となるでしょう。

（石原道洋氏　提供
寿福　滋氏　写真撮影
八日市市教育委員会写真提供）

引用資料

○『雪野山古墳』　八日市市教育委員会・雪野山古墳発掘調査団
○『雪野山古墳第3次調査現地説明会資料』八日市市教育委員会・雪野山古墳発掘調査団（第2図、第3図一部改変して転載）